

【研究者】 高原 基彰

(助成決定時) 東京大学大学院 人文社会系研究科

社会文化研究専攻 社会情報学専門分野 博士課程在学中

【研究題目】

東アジアのポピュラー文化とグローバル化の多義性

パンク・ロックによる「地域」の発見

【研究の目的】

本研究は、東京・ソウル・北京の各都市において、パンク・ロックというサブカルチャーの現地調査を行い、東アジア地域の文化交通を実証的に捉え直すことを目的とする。

従来、アジアの文化交通に関する研究は「日本とその他のアジア」という枠組みで行われてきた。そのため、問題関心は「日本文化が各地でどう受容されているか」という点に絞られてきた。しかし近年、東アジアの各地には日本以外にも文化の送り手が出現しており、受け手と送り手が分散する中で、相互的かつ多角的な文化交流が行われるようになった。こうした現状認識のもと、本研究は複数の国におよぶ調査地へ赴き、当事者たちと接触することでその実態を検証しようと試みた。

その際、現代のポピュラー文化はアメリカの影響の世界的拡散という要因を無視することができず、国別に文化を分類する枠組みは妥当性を欠くという判断から、対象の選定をポピュラー音楽のジャンルで行うこととした。なかでも特に活発な地域内交流を行っているパンク・ロックを対象とした。

【研究の内容・方法】

上記の目的を達成するため、具体的には以下の3つの作業を行った。

第一に、現地調査により、実証的なデータを収集することである。韓国と中国それぞれにおけるサブカルチャーの中心地、ソウルと北京においてフィールドワークを行い、パンク・ロックに関わるミュージシャンやメディア関係者、およびオーディエンスに対するインタビュー調査を行った。これにより、生産者/媒介者/消費者という、これまで別個の研究対象とされてきた多様な立場の人々と接触し、それぞれがいかなる意図で「東アジア」という地域に関心を抱き、実際の活動におけるネットワークを構築しているのか、またそれぞれの立場の間にはいかなる対立あるいは協力関係があるのかという点についての当事者言説を収集した。

第二に、現地調査によって得た知見を、より巨視的な文脈に置き直して考察を加えた。現在の東アジアにおける文化交通は、韓国という新たなプレイヤーの台頭と、中国の「潜在的な巨大市場」化を軸に進行している。日本と韓国の間では、互いの文化商品を輸出

入し合う動きが活発化していると同時に、中国市場への参入においては、日韓に台湾・香港を加えた4つのプレイヤーの競争関係が形成されるようになりつつある。その背景には、韓国・中国がともに高度産業化を遂げ、中間層人口の増大とともに、文化・コンテンツ産業とその市場の成長を見たことがある。こうした要因を前提とした上で、各国の当事者たちにはいかなる利害の一致や齟齬があるのかという点について考察を加えた。

第三に、これらの考察から得られた知見を元に、社会理論の領域と、実際的な提言の双方にまたがる提言を行う。理論的な領域においては、「東アジア」という地域認識を検証することで、文化のグローバル/ローカル化をめぐる議論に「地域化」という新たな視点を提示する。実際的な提言としては、「東アジアのコンテンツ産業」の将来を予測するとともに、現場から見えてきた問題提起を行う。

【結論・考察】

本研究から得られた知見は、以下の三点に要約されうる。

第一に、東アジア地域内の文化交通は、多品種少量生産化と情報産業化、つまり「高付加価値産業」への転換という背景があり、90年代半ばには文化産業が地域共通の通商産業的な議題として浮上するに至った。

第二に、その内部では成功と失敗の落差が拡大していた。国家支援を受けていても、大多数のものは収益を上げられない。その結果は偶発的であり予測が難しい。最初大企業と国家政策の着手した文化産業が、失敗して大資本の手を離れ、都市の若者のサブカルチャーへと後継されていくという構図が各地で見られた。

第三に、「東アジア」地域は、アメリカ中心のグローバルな文化市場への発信が困難な現状における、次善の市場と見なされていた。特に国内市場の狭小な韓国ではその期待が高かった。しかし上述の理由から、ごく一部の例外を除いたコンテンツ産業は、その担い手も観客も下層中産階級の若者を中心とするようになっており、その存続と経済効果については予断を許さない状況があった。